

にはこの黒子の地にのみ與へられて居るのであらうかと疑はれる。

太陽は西に沒した。暗い暗い夜の幕は刻一刻、此山里を襲ふ。嗚呼夜が來た。さびしい夜が來た。惘然たる折しも久遠の梵鐘は一聲。この山里を震はした。

——(身延ホテルの丘上にて)——



我が書齋

二 宮 龍 巖

與へられた室の一隅は私の書齋だ。單調と無味を柔げる爲に机上に小さな一つの花瓶に一輪の秋菊の花を挿して、それで私は充分に此の書齋を愛する事が出来る。悲しい時にも嬉しい時にも私はこの机の前にどつかと坐る、と挿した秋菊が私の眞の友になつて慰めて呉れる。二三日前に室の入口に『來者不拒之去者不追之』と書いた紙片を貼りつけて見た。この書齋が『私のものだ』こう思ふとき室に對する強い愛著が起つてくる。(大正一二、一〇、九稿)



凝 視

今 泉 智 旭

みるまゝにやまかせあらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。

千年の昔、雲上人が熊野の山に詠せられた此の歌、所と時と想とを異にしたSは今身延の山の夕景を眺めつゝ寂寥、煩悶、焦想とに閉された胸を抱いて足ばやにきざみ行く夕雲を見送つてゐる。

笹箒を引き千切つた様なあの雲に、金線を織り込んだ様なあの雲に、自然は何を語ろうとしてゐるのか、神は雲に何を暗示せしめ様とするのか、地上に蠢動する人間は自然の無言の教、神の暗示を一寸だに解り得るだらうか。

深い沈黙はつゞく、神は存在するか、魂は何れへ歸納するか、又どんなに活動するか、顯界があるから幽界も當然あるといふあまぬるき筈に満足し得るか。

松を吹く淋しい叫びを、谷川に碎ける水の流を、ドン／＼と響く太鼓の音を、神はどんなに聞くのか。

風が吹き砂塵を捲き、晚鴉が鳴き、夕陽が淡く、夕雲が走り、遠い山や里が淋しく暮るゝ身延の夕景は嵯峨や御室のそのの様に見えないだらう、けれども一度打突つた鐵の門扉を開けやうとするSの心眼には深刻に夕景の有様が映じてゐるのだ、焦想しきつたSの胸には強いヒントも烈しいショックも與へられずに湧くものは焦想と煩悶の雲のみだ、小さな反感のみだ。

乾燥した冬の空氣を縫ふて行く梵鐘の響は人生の岐路に立つSには次第に消え行く音の彼方に、大氣を震動させるのに、？を以てあらはす丈けそれ丈け焦想がある。

みるまゝに山風あらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。

せめて身延の山の夕景を之丈に見たかつた。然し己に遅い、時は流るゝ、夜のとばりに消え行く山の夕景に残るものはたゞ焦想、煩悶寂寥のみ。

身を刺すやうな風に肉眼を開いたSは吾と吾が足に蹴つた石塊を凝視した。

あゝこれも顯界か幽界か。

かくて山の夕景は？をのみ残して夜のとばりをとぎした。(一、二三日作)